



平成22年4月号

発行日 平成22年 4月22日発行
発行者 広島経済同友会 尾道支部
住 所 尾道市土堂2-10-3 商工会議所ビル3F
Tel 0848-23-2222 Fax 0848-23-3333
E-mail: onodoyuk@urban.ne.jp

広島経済同友会尾道支部

平成22年度事業計画

支部長 吉田大造

＜基本方針＞

経済大国論から平成版「小日本主義」へ

まさに終戦直後の1945年8月25日の荒廃した日本において「更正日本の進路—前途は実に洋々たり」と発表された論説がありました。後の内閣総理大臣、石橋湛山による意見です。当時からすでに、技術や人材といった日本特有の資質である今で言うところのソフトパワーの潜在能力を高く評価し、技術立国、科学立国を強く提唱し戦後日本の復興の可能性を国民に鼓舞した論文です。

戦時中からの持論でありながら当時の拡大、膨張主義の日本では抹殺された意見でしたが、敗戦後の日本の方向性として自由貿易・ソフト重視の経済発展を唱えた意見として注目を浴びました。

国内総生産(GDP)で中国に抜かれようとする今、単なる経済規模の数値のみを追いかけるとをやめ、経済や国民生活の質の向上にもっと目を向けて、独自技術や日本人に固有の特質を活かした秩序ある調和の取れた経済発展を目指すときに来たのではないのでしょうか。

1989年の「ベルリンの壁」崩壊から今年の11月9日で20年が経ちました、同時に冷戦が終結し真の経済のグローバル化がほぼ世界中で一気に進んだ20年間だったといわれます。同じ年の6月には中国で天安門事件が起き、その後「改革開放」の号令のもとに「社会主義市場経済」が党大会で正式に決定され、「眠れる獅子」中国がその巨大な人口を背景に世界経済の表舞台に踊り出てきました。日本ではその年の暮れにバブル期の最高株価を記録し、以後「土地神話」に立脚したバブルは約二年後に完全に崩壊しました。

「我が国、我が街、我が社、我が身」

周囲と対比した価値観に振り回されるのではなく「我が国、我が街、我が社、我が身」を今一度振り返りその特性・個性を最大限に引き出し、真に価値あるものを作り出す時が来たのではないのでしょうか。世界同時不況に苦しむ今の日本にあって、個人・企業もまさにその「生き方、Way of Life」が問われています。世界の中にあって日本人として、企業・個人として真の矜持を各自がもって生きていく時が来たと強く感じます。「成功は長期的には失敗の種子を内包している」と言います、世の流れに惑わされず、真に変わらないものを見出す力が求められていると思います。

古来より「四通八達」の街としてその名を日本全土に広めてきた「尾道」という素晴らしい郷土に立脚する我々は外部に活を求める前に、その恵まれた環境を今一度見直し再活用することが最も必要なことと思われまます。



＜事業計画＞

- ①基本に立ち返り、会員企業の発展と尾道の活性化にとって必要な行動を提言していく。
- ②会員の拡充と会員相互の研鑽のための機会・機能の充実を図る。
- ③街の将来にとって人材の育成が最も重要であり、その基本となる教育の充実に向けて「尾道教育会議」へのより一層の参加と支援を継続する

副支部長としての思い

副支部長 三谷 誠一

この度経済同友会尾道支部 副支部長の要職を拝命致しました。僭越では御座いますが一言御挨拶申し上げたいと思います。経済同友会は、企業経営者が個人の資格で参加し一企業や特定の業界の利益に捉われない立場から、自由に議論し、見解を社会に提言することを特色とするところがあります。

戦後の混乱期の中、若手経営者たちがお互いに切磋琢磨しながら親交を深める団体が必要であるとの考えから、昭和21年に設立されました。設立趣意書には当時のメンバーの並々ならぬ意気込みと理想主義が込められています。

1979年頃に「ジャパンプラザナンバーワン」という著作が著されたように、戦後の経済成長は先人の弛まぬ努力と汗の結晶とにより目覚ましい発展を遂げることが出来たのであり、一時はGDPで世界No.2まで上り詰めた日本ではありました。バブル景気が1991年に崩壊し失われた10年を経て、日本の現状はデフレスパイラルに陥っているのではないと言われる程、円高、金利安、製造業の不振、地価の下落等日本経済は低迷しています。それは経済的国力の低下だけでなく、戦略なき政治の混迷、自民党政権の崩壊、教育の荒廃、国民の倫理観の低下等、日本そのものの国民力の低下もその一因に有るのではないのでしょうか。

現在日本のGDPはOECD(経済協力開発機構)加盟30か国中18位に低迷しています。経済力で世界のトップに近づいた日本が、驕り、慢心し、そして人の心が頹廃することにより国民力は低下して行くのは、自然の流れでありましょう。何れの日か頂点から落ちていくのは、世界の歴史の中で証明される事ではありますが、今日の日本はそういう低落していく時期に差し掛かっているのではないのでしょうか。

同様に同友会とて、発足以来60年もたてば、志ある人々によって、戦後の荒廃の中から夢と理想に燃えて発足した同友会から、長い年月と紆余曲折を経て、同友会そのものにも変化が起こるのは当然でありましょう。さらに言えば、「経済老友会」とか「どういう会」とか揶揄され、また最近同友会を経て、経団連や、日商の要職に転ずる財界人があまりにも多いため財界人養成所などとも言われているようです。全体として同友会不要論、他団体との合併の声を払拭出来る程の存在感を示すに至っていないとの意見も有ります。

そんな事が言われている同友会ではありますが、他面、本来同友会というものは、会員相互の啓発と、切磋琢磨しあう場所であり、また会員お互いの親交を深める倶楽部的場所でもあるとも言われております。

そういう考え方の中で、吉田支部長の本年度の方針の中に①基本に立ち返る②会員の拡充③人材の育成と言う三つの柱があります。支部長を補佐し支部長の基本方針の下に、同友会の存在意義を示す事が出来たなら、これこそ我々役員にとって大変意義深い事であると喜びに耐えられません。どうか諸先輩皆様方の御指導御鞭撻を切にお願い申し上げます。

